

會



報

1952年1月

159

日本山岳會

ヒマラヤの

先驅者

望月 達夫

ヒマラヤの先驅者とよばれる人の中でも、ヤングハズバンド卿は一番その名に相應しい一人だが、そのイン・メモリアムの中でメイソン教授はこんなことを書いてゐる。

『凡そヒマラヤの探検に關心を寄せる程の人にとつて、ヤングハズバンドの死は到底満了すことのできない大きな空虚を残した。あの著名な初期の探検から、ある種の靈感を受けなかつた者があるだろうか。』

私がまだ子供の頃、彼の「大陸の心臓」を読んだ時の感激を、今でもはつきり想起することが出来る。それ以來彼の筆にえがかれた内陸を私自身の眼で見たいと、どんなに思いこがれたことだろう。』

それで思い出すのは、同じメイソン教授が曾て王立地學協會からゴールド・メダルを授與された時の挨拶である。「アルプス記」によると、いま私が引用したと殆ど同じ言葉が語られているからである。

ヤングハズバンドは、彼自身謙

遜して書いているように「ヒマラヤの高峻な頂に登つた経験は無かつた。』そして『もつとつまらない谷筋や峠の間を歩いた』のだ。併し彼が後進のヒマラヤ探検者や登山者に與えた影響は、彼が生涯をかけて燃焼し続けたヒマラヤへの情熱と、あの世界宗教を提唱した程の廣く深い心情によつて、思ひの外に大きかつた。名著「エヴェレストの叙事詩」はつとに邦譯されて、わが國でも多くの讀者をもつたが、彼が特に英國のエ峰遠征と切つても切れぬ關係にあつたことは、第一回のエ峰遠征が、まさに彼の王立地學協會々長時代のことであり、且エ峰委員會の委員長であつたことでも十分知られるであらう。

『サア・フランシスはマロリーやノートンのように、初期のエ峰遠征のインスピレーションだつた。』

ヒマラヤへ行く人々は出發に先だつて必ず彼の意見を求め、彼の著作の幾つかを雜囊にしのばせたものだ。そして歸つてくると、きまつて彼の處へ報告していくのが例だつた。われわれが後年ヒマラヤン・クラブを創立した時、まづ意見を求めたのも他ならぬ彼だつた。彼の深い経験は、何時でもわれわれの役にたつもの許りだつた。』とメイソン教授は語をついでいる。

彼は一八六三年印度パンヂャブ

地方に生れ、一八八二年英國の陸軍大學を卒えて親衛龍騎兵聯隊に入隊した。青年將校として印度に赴任した彼に多くの感化を與えたのが、ヒマラヤを踰えて初めて新疆省へ出た最初の英人である伯父のロバート・ショーだつた。探検に對する比類稀な彼の愛は、この時代から發生し彼の中で燃え續けた。

一八八六―七年には長白山脈を越え、次いで北京を振出しにゴビ沙漠を横斷して、歐人では何人も越えたことのないムズターグ峠を越えて印度へ達した。

一八九〇年印度政廳に轉じ爾後十餘年間印度各地に在動した。その間一八八九年にはパミール及びフンザ地方へ、一八九〇―一年には再びパミールへ出掛けた。一八九一年には先の探検に對し王立地學協會から探検家最高の名譽であるゴールド・メダルを授與され、またCIEを授けられた。一八九二年チトラル探検に際してはタイムズ特別通信員として活躍し、一八九六―七年にはトランスバール及びロデシヤに勤務した。一八九七年結婚。一九〇三年には英國の西藏使節團の首席に選拔された。

一九〇四年KCIE(ナイト爵)を、一九一七年にはKCSIを授けられた。一九一九年王立地學協會々長となり、一九二一年エ峰委

員會委員長に選ばれた。晩年は主として著述と讀書に親しみ、多くの著作を遺した。

彼は「虎を想わせるような相好」と、頑丈な體軀の持主だつたが、その物腰はおだやかで口數は少なかつた。オコンナーの想ひ出によれば「身邊の危険や外交上の危機に際會しても、何時も沈着冷静で力そのものゝように毅然と立ち、勇氣と信頼とを感じさせた。しかも、重大な局面に於てすら、必ず微笑ましい半面を見ることができた。この冷靜な振舞いの蔭には、彼が生涯をかけた願想と讀書に裏打ちされた深い悟得と哲理がひそんでいた。餘人の到底眞似られないような、この心の落付きを彼に與えたのは、まさにこれであるがためだつた。彼の思想の概要は晩年の著作の中に見ることが出来る。彼の提唱した世界宗教は、特定の教義に制約されない、全人類に享け入れられる精神的な共通分母を求めようとするものだつた。』

一九四二年と云えば今次大戰のさ中だが、サア・フランシスはロンドンで八十歳の永い生涯を過ごした。『彼の名は、彼が成し遂げた行爲と共に、曾て彼が在つた土地と共に、末永く命脈を保つてあらう。』

☆☆☆



ヘルヴェチアヒュ
ツテの二十五年祭

山崎春雄

瑞西の建築家マックス・ヒンデル君が設計し、そして今北大のものとなつている三つの姉妹小屋の中で、ヘルヴエチアヒュッテは封建社會の子女の間によくあつた様に、彼女が生れる前からすでに同じ年に創立された北大山岳部と許婚の關係におかれていた。そして双方が本年二十五歳の齡に達すると共に、珍らしく早い銀婚式の祝典を挙げたのである。

十月六日の午後、部のＯＢたちと共に定山溪から營林署のトラックを出して貰つて、私だけは目出度い式に列席する親代りの老人らしく運轉臺に乗せられ、小椋内川の溪谷の毎年のことながら目の覚める様な紅葉の山々を送迎しながら、私は盡きることのない回想に耽つていた。

十五年前の山岳部の十週年祭には、北大ではJACの木暮會長を招待して、中央講堂で盛な講演會を催した。その時の會長の

御宿は札幌のJAC御定宿——へルヴェチアに僅か先んじて同じくヒンデル君の建てた圓山の私の家——そこで愉快な木暮さんの夜話を拜聴する幸福な機會に恵まれたのだつたが、山の方は時期が不當であつた爲に小屋の記念祭の集合寫眞の群の中には木暮會長の顔は交つていない。

次で五年前の二十週年の祭には好運にも忙中如何にしてか閑を見出された松方會長を迎えることが出来て、この時も札幌は圓山の御定宿、小屋へは同じ紅葉の道と同じトラックで往復した。

その日は天氣も悪く、夜はランプに石油も無く乏しい蠟燭の火も消えた暗黒の小屋の中で、部員たちは姿の見えない松方さんの聲に耳を傾けた。然しその力強い若人への啓蒙の言葉は、當夜の物には乏しくとも再興の希望にみちた祝典への豊かな贈物であつた。

本年の祝典にも、五年前とのよい均衡のために再びJACCの會長を迎えたいと熱望したのであつたが、外的事情のために實現出來ず、ヘルヴェチア即ち瑞西小屋の二十年紀念式に、グリンデルワルドを第二の故郷とする」會長の姿を見られなかつたのは誠に残念なことだつた。

二十五年前、即ち一九二七年の七月下旬に小屋の建設のために錢函峠の夏道を登つて行つた縦列は、次の少數の人たちから成立つていた。

ヘルヴェチア側は、建築家マックス・ヒンデル君、福島高商のドクトル・ワーゼ
ル。日本側は、恵庭の舊土人水本等三名、
新土人の私、北大の學生植田、徳永、加藤
の三君、即ち合計九人の隊員が三つの民族
によって代表されていた。

ツテの恩人である。彼の血の中を流れている抑えることの出来ない本能的の自然への強い愛情が、その夏の五十五日にわたるその仲間との生活の精神的支柱となつたのであつた。彼は郷里の千歳川沿岸で並ぶものなき丸木舟作りの名人であつた。ヒュッテと共に恐らく正倉院の様な壽命を保つだらうと思はれる小屋のくり抜きの大きな流しは、彼の造船術にすれば何でもない餘技の産物であつた。

彼のつれて來た男の一人は、村で「はびろ」使いの名人と云われて、白樺の丸太小屋の困難な仕事を豫想して思慮に富んだ水本が特に選んで同伴した者であつた。

白樺の樹幹は林内の立木としては蠟燭の様に眞直に見えるけれども、用材として選ぶときには必ずひどくねぢれて居りユルユル抜きの様に螺旋を描いているものだつた。

後になつて私は、ゲエテの植物變態論の中に、彼の第二の生長原理である螺旋的成長の代表者として白樺の幹が挙げられ、その性質の故に到底建築材として用をなさないといふと記されてあるのを讀んで、我々がベチユラ嬢の容色に誘惑されて、その不良性のために餘計な苦勞を嘗めさせられたことを思い知つたのである。

許可の極印を打たれている樹を伐つてこれを小屋の建設地點まで運ぶのは瑞西の若いドクター及び北大の三人の學生たちの辛い仕事であつたが、その丸太から小屋の壁體の材とするために、二つの平行の面を削り落すのが前記の各人の専門の任務であつた。其名の由來する物凄い大斧を眞向から振下すと、彼の足下に踏まれている滑かな白い肌を持つた樹幹から、皮付きの大きな肉片が遠く飛散して見るものゝ肝を冷すのであつた。

水本は種族の傳統を承けた名譽の獵人であつたが、種族の今一つの名聲への野心乃至素質は不思議にも全然持つていなかった。彼の欲するものは鉛の玉の外には無害な簡製の銃彈で事足りたのである。

これに反して他の二人の間は多分に彼等の共通の嗜好を持っていた。ことに夏席使いの名人の方は、頻りに名人らしい週刊的の渴きの發作を起して、翌日には仕事場に姿を現わさないことがよくあつた。

「あの人はきつとクリスチャンです。あの
人よく安息日守ります」とヒンデル君が、
「理解十分なる寛容」を以て學生たちに教
れた。

私は長期にわたる山上の「現場」の「帳場」をつとめたから、當時の私の手帳には工事と生活に必要なとした物資の一切の出納が記入されていた。

峠を越えて運ばれたものゝうちで、ことにその頻繁さで目立つたのは特別の強い飲料の一種であつた。ヘルレン側には當時の銘柄への興味はなかつたからその消費は

専ら二人の先住民が引受けたのである。この仲間のエネルギーの補給と、グーテラウネの維持のために此の生命の泉の供給は絶対に必要のことだったのである。

その夏の八月一日の瑞西國祭日を我々は山上で迎えた。其夜のキャンプの火は特に明るく、ヒンデル君はその日のための取つときの瓶の栓を抜いて、異邦人の我々と共にこの瑞西最大の祭日を祝つたのだつた。

その一九二七年から五年を経て三一年の夏に今度は私がグリーンデルワルドで同じ八月一日の祭日を迎えた。ザミ・ブラバンドの母親が經營していたパンシオン・ゾンネンベルグ——JAC御定宿——では私がたつた一人の日本人の客であつたが、同じく村の教員であつたザミの異父の若い弟が三階の高い棟の上に登つて夜空に屹立するアイガーと高さを競う勢で盛に打煙火火を上げていた。しかし下の村はお客のあまりなかつたその夏の避暑地は、どこも同じであつたようにびつたりと静まり返つていた。

私は五年前、遠い他郷の北海道の森の中で焚火の火光に面を輝かせたヒンデル君が「世界中の瑞西人の中で私等ほど幸福な今夜を迎えた人間が外にあるだろうか」と云つて杯を舉げた時の様子を思出した。きつとその時藝術家の創作の歡喜がその脈管の中をたぎり流れていたのである。

今年の祝典は幸にすばらしい好晴に恵まれていた。

眩しく黄葉した白樺の圓柱列をめぐらした小屋前の空地には向う側の人が小さく見

える位の大圓周を描いて豪華な厚板のテーブルが配置されていた。この巨材は天が上流の橋を落して小屋の後の河原に無償の流木として積上げてくれた贈物であつた。但し石とセメントで築かれた橋脚は流れて来なかつたから、この空前の大圓卓にも脚まではついていなかつた。それで四十餘人の文化人は皆太古の姿に歸つてずらりと圓卓の後にうづくまつていた。

圓周の中心の物凄い火山のような大焚火は林内の日が暮れると共に明るくなり、照明を下から受けた我々の頭上の樹冠は星光の寶石をちりばめた夜天の大穹窿の下に、更にその調和と形の純正とでいつも目を驚かす木葉模様、裝飾畫の圓蓋をつくつていた。

二十五年前の小屋建設のキャンプの火の上にもこれと同じ天井畫があつた。幾萬年この方森の中で人類が火を焚く頭上にはいつもこの二重の天井があつたのである。

地上の圓卓の上では山海の珍味が豊かな静物をつくり、部員の特別サービスの強い飲料の瓶がその間を循環しはじめた。その液の濃さを註釋する三十五度といふ數字が私の席の近くの老兵たちの間に深い感銘をよび起したようであつたが、私にはこれが亦二十五年の歳月を一瞬に逆轉させる魔術の働きをなしたのである。

あゝこれこそ、その昔山のあなたの人里からヘルヴェチアの現場へと、幾度となく峠を越えて運ばれたあの幸福の泉の水ではなかつたか。

根性のひねくれた古典的的不良少女と取組

んで、堅氣の良材にまでたゞきなおす勞作は、すべて無學な自然兒の奉仕によつてなされ、その毎日の精氣の源泉として、この三十五度の液體がなくてはならない役割を果したのではなかつたか。

この小屋の二十五年の祭典に、その四壁の材に灌ぎかけて神の庇護を祈り下す聖水を必要とするのだつたら、ヒュッテの洗禮の水と同じ水が、再びこん／＼と泉のように溢れ流れた今夜の宴こそは、まさしく神々の御意になつた祝祭の形態であつたにちがひなかつた。

この聖なる水の威力は圓卓の近代人にも働きかけて次第にその文化の甲殻からの脱皮作用を起させ、火花の強い明暗の階調で描き出された群像の様相は、まさに有史前の森の宴への奇怪な連想を起させた。

早々小屋の中に逃避して眠袋に横わつていた私は例によつて中々安眠が得られなかつたが、登山の古典によれば山上では往々ガラス瓶の壁を透して内容が理解出来ない減少を示す不思議な現象があると云う。私にもこの夜はその液體の蒸氣が何物をも透して強く働きかけたのであらう。戸外の歌聲や石器時代の舞踊のステップの物音が、永久につゞく溪聲の伴奏に雜つていつとなしに私の魂をそっくり祖先の神々の天への飛揚に誘つてくれたようであつた。

られる。

これらの建築のどこかに何か缺點があるとすれば、それは建築主の財産の貧困に災されたもの、たとえば札幌のJAC御定宿なるパンシオン・ルンドベルグの場合の如きもの、或は他の或る場合のように建築主の頭腦の貧困が影響している場合であらう。

ヒンデル君は、日本での自分の作品の中ではヘルヴェチアヒュッテが一番気に入つたものだと言つていた。

又、路行く人の喜びとなるもの、わざわざ廻り路してもその前を通りたいようなものでなければ、建てる價值がないとも云つていた。

今度の大戦の始まる前、獨乙との二重國籍を持つていてよく獨乙大使館の仕事をしていたヒンデル君は、獨乙展覧會の用件のために北海道に来ていたのであつたが、獨乙宣戰の報を聞いて急に歐洲に歸る決心を以て私たちと袂を分つたときに、今一度ヘルヴェチアヒュッテを訪れるためにあの山道を越える路を取つて札幌を去つたのも、そういう氣持からであつたのだと思う。小樽内川上流の白樺林の奥に、自然に在るものゝ如くにそこに在るヘルヴェチアヒュッテは、そういう建築の一つである。

私たちはそれ以來、杳としてヒンデル君の消息を知らずにいる。二十五年祭の明るい氣分に一抹の暗影を投げるのはその一つの事であつた。

(カットは上田哲農氏)

ある登山家の邂逅

成瀬 岩雄

(その二)

それはクギの一行がブルーエの宿に山から歸つて来た時の事から話は始まる。

『ホテルのテラスは又も我々の歸りを迎えるお客で一杯であつた。註(一)我々が近づくと二人の人が——その人のことを思うと誠に愉快だが——其の一行から離れて来た。一人は息子を喜び迎える父親と、一人は私の處にやつて来た華奢な人。私はその人は今迄に會つたことはないが、もう本能的に判つてゐた。その非常に高貴な眼は私を恍惚たらしめたのである。』

クギにとつては正にキリストの再来にでも會つた信者のような氣がしたであらう。ウィンバー、そしてギドー・レイ、そしてクギ、と登山史の頁は唯運命の神の手によりて、飾られて行くのではないか。

でも一つ、私を喜ばせたのは、アルバインクラブの大御所、今は亡きフレッシュフィールドがタケットに初めて山の宿で邂逅した時の感激を洩らしているのを讀んだ事があるが、あのフレッシュフィールドみたいな巨人でさえそんな事があつたのかと思わず一大発見でもしたように嬉しくなつて私は即座にアンダーラインを引いてしまつたのである。相手は勿論、名にし負うタケットではあるが、此方も唯物ぢやないフレッシュフィールドであるから、役者にとつて不足はないし、實に又と得難い舞臺ではないか。

では勿論のこと、「山岳」に以前掲げた松方三郎さんの「フレッシュフィールドを思ふ」等によつてその巨人たる所以は『一世紀半に餘る登山史上に活躍した多くの先蹤者の中から精悍と呼ばれ、一騎當千と謳はれる山岳人を十人や二十人選出すことは決して難しくない。科學的に、又は文學的に我々に盡きる所の無い遺産を残した人も決して少なくない。然しその「柄」と「格」との両方から云つてフレッシュフィールド程の偉大さを併せ備えた人が何人居たことだらう。彼の存在には、澤山の人家が建て込んで中の一隅立つて聳え立つ伽藍を想はせるものが確かにあつた。こんな事が我々をして別の意味でも彼を巨人と呼びしめるのに充分な理由を與へて居るのである』という一節によつて骨の髄迄教へ込まれていた私にとつて、このタケットとの邂逅の場を讀んだ時は、正直の所、最後の讀み終わるまで、なんというか「そんな事があつたのかなあ」という半信疑いのような、半分嬉しいような氣がしてならなかつたのである。

(4)

彼は口を開いて手を差し伸べた。「レイ」と私は叫んでしまつたのである。私は直感で「レイ」に違ひないと思つたからである。ギドー・レイ。イタリアの生んだ偉大なる登山家。私の最も憧憬の人。何故なれば唯山登りだけでない、その感情と言ひ、文章と言ひ、アルプスの文學者として、又山の詩人として、正に最も高尚なる精神的の人。私の内底の魂が昔、自分に囁いて表現されなかつたことが彼の文章に實に燦然と書かれてゐる。その描寫たるや、よくも人間があつたに和やかな、優美な言葉で表現でき、その仕上の完全な出来栄は、私の夢にも考えていなかつた、あの描寫を私は幾度か讀んだことであらうか。その描

寫はまるで讀む我々も一緒に、その登山の苦しみを分け合つてゐるような、一緒にでも登つてゐるような(それは何時であつたか、そしてどうやつて)奇妙な感じを與える描寫ではないか。素晴らしい優美な人格者にして指導者。偉大な紳士にして藝術家。彼の魅力は私にとつてはなんと有益であり、又力強く、後々迄残ることであらう。彼と偶々一緒にいたその時限りの瞬間でさえも、日を黄金化したのである。そして其後山々が我々を又邂逅させた所では何處でも私の目をくらませたのである』と。

勿論、フレッシュフィールド自らの筆になるものを讀んでいる自分を充分承知してゐながらもなお、こんな氣持で唯夢中になつて讀まされてしまつたのも、矢張その「巨人」という先入観に完全に壓せられてしまつていたのであらうか。併し考えて見ればタケットについては、レスリー・ステイブンでさえも『タケットとは昔の古い、アルプスの話の中でチョット傳説掛つた話であると必ずタケットの名前が出て来るの

である。それはまるでギリシャの神話の中に出て来るユリアスや、ニールンゲンズのジークフリートのように、實際、彼に匹敵する者はなかつたのである。西はモンテ・ビゾー、ドーフィネから東はカリシヤ、シチリアの原野に至るまで、この偉大な旅行者の功績というものは、轟き渡つてゐるのである。或地方では村民が岩壁の遙か高い所の割目を指して、あれはタケットの力強い氷斧の一振りによつて削られたのだとか、或地方では、タケット・スピッツェはタケットの遺骸の墓石だとか、又或地方では氷河の碎けた塊は昔から到底登れないとされてゐた山に登らんがために、タケットが建てた階段であるとか、まるで普通の人間だとは思われてゐなかつたのである。それはもう、太陽に他ならないのだ。朝まだきから一番高い所に現われて、最も近寄り難き峯の頂を飾り、遙か彼方の谷を貫き、殆んど信ぜられぬ位の短時間の間にアルプスの一端から他の一端迄を通り過ぎる太陽に他ならないのだと人々はいふかも知れない位の人であつたのである』と言つてゐる程の偉物であり、その年齢から言つても一廻りも下のフレッシュフィールドは未だ拾九才のイートンの學生で、彼が後に終生の好き友としたというフランソワ・デグアッスウでさえも未だボーター域を脱したばかりのガイドであつたという一八六四年の頃だとあつて見れば、或はさもありなんと、初めは双方で密輸入者と間違えてゐるのであるから話は益々面白いのである。

それはフレッシフィールドが一八六四年の夏の事、ベルニナ山群中のバル・メローを下つて来た時の事に始まる。

『我々はメローの谷を下ドン下つて行く、と恰度デイスグラチアの後から夜が明けて来て、ラジカのシャレーに到着した。そこで一つの、尊い交友のキツカケとなる、自分にとっては興味深い出来事が起つたのである。それはその後の登山にも関係あるから此處に記すのである。』

誰か、人が納屋の中で動いているように聞こえ、燈火が動いているようである。こんな早い時刻におかしい。暫時、我々は密輸入者の一隊でもツオツカの方へ行こうとしているのに遭遇したのかなと思つた。併しこんな暗闇でも馬鹿に目立つ密輸入者等は決して穿かないような、白いフランネルのズボンが出て来て戸口に現われて来たのである。顔は判らないのだが、我々が言葉交わす暇もなくその後から別な、もつと驚かされるような幽霊みたいなものが現われたのである。まづ判つたのは大きなランブで四方長い黄色のスパイクのようなものが飛び出た、後光のさすような光りがした大きなランブが眼についたのである。が直ぐその燈火を持つた人間は判然としてきて、ランブの光線で科學的道具の入つた明るい皮のケースが見えてきた。そして聲を出したのを聞くと、それはタケットさんとそのガイドがそこに居るといふ聲を聞いたのである。

私は未だ若いし、登山家としても経験も浅かつたけれども、アルパイン・クラブの

ことは唯風聞だけは知つていたし、當時、クラブに對しては充分尊敬の念は持つていたのである。クラブの會員なんて私にとつては、あのお寺の塔の上の狭い一點に三人も、バランスを失わずに止まつてゐるユダヤ教の天使のように、さながら引力の法則を無視してゐる——登る事ばかりしか知らない——人間だと思つていたのである。それよりも、もつと偉い人達（タケットの一行）——タケットは既にクラブのコミッテイをやつた後であるから、唯の平の會員ではない、コミッテイをやつた位の偉い人という意味であらう——筆者——私はもう聖靈に等しいと思つていたのである。その聖靈のリーダー——私は、あのミルトンの詩

我々の本来の動きというものは

上へ上るのだ

下に落ちるなんていうことは

順逆を誤つてゐるのだ

を思出したのである。

とに角、私にとつては私自身このリーダーそのものに、不意に遭つた時には、瞬間畏しい氣がした。その登山に於て、行動の活動的にして、在らざる所なき、不屈なことは、ガイドの連中の間に於ても、「タケット」とは鬼みたいなものだといわれていたのである。更に私は、之は若しかしたらタケットさんが私と同じように未知のバスを越えて、バル・マジノから一日でアバール・エンガーディンに越えられれば越えようという意圖を持つてゐるのではないかということをフト思いついて、この偉大な

「山を殺す人」と同じ目的を持つてゐるという豫感がして、自分がそんな大それた事をしたために、後の祟りがどうかなるのではないかを恐れたのである。

タケットさんが計畫してゐるのを此方が先によつつけるといふような、そんな大それた罪を犯した、何か自分として間が悪くなつて、半分、顔色に出たのが原因にでもなつて、タケットさんが私の顔色を見てとつて、我々が先刻、タケットさんを密輸入者と見違へたと同様に、タケットさんも我々を、彼が前日にアルピナ氷河で遭つた密輸入者の一隊と間違へやしないかと思つたのである。が相互の杞憂は忽ちにして氷解した。それ以上心配することはなかつた。

デイスグラチアに登ることが當面のタケットさんの目的であつた。そして翌日エンガーディンに越える積りであつたが、彼の簾はもう既にそれ迄に澤山、山やバスの初登山や初通過をやつて一杯だつたので、私の如き細やかな、マジノからエンガーディンへ一日で越える旅行等は、彼は他人にまかし得たのであろう。我々は御連中と合同し

たら面白かつたかも知れなかつたのであるが、サンモリッツで、會う人に約束があつたので敢えて、サンモリッツの反對側に止つて天氣でも悪くなつて足を止められるのは困るので、敢えて踏み止まらなかつたのである。』とフレッシフィールドは記してゐるが、十九才のイートンボーイと「鬼」の對面とあつては如何に後世名を残した巨豪フレッシフィールドでも矢張りろしかつたのであろう。お客がガイドのことを「鬼」と

いうのなら、未だ話は判るけど、「ガイド」がお客を「鬼」というのだから、當時、タケットとは餘程の偉物であつたのであろう。併し純眞なる青年の眞實の告白とでもいふ可きか。誠に素直な、彼としては之が精一杯の、併し溢るゝ熱情は如何ともし難しという告白ではないか。しかもフレッシフィールドは幼少の頃より前年迄は、女流登山家なる母、ヘンリー・フレッシフィールド夫人に伴われて山歩きの手ほどきをされて来て、漸く此の年、初めて彼のいうカレッシュフレンド二名と、ガイドだけで山歩きに出たので、いかに山を想う熱情こそは満々たりとは云え彼は未だクラブの會員ではなかつたのであるから。彼の簾は假令、タケットのそれには遠く及ばずとはいへ、たとえ半日と雖も「聖靈」のリーダーと行を共にしたその喜びの簾は如何ばかり重かつたであらう。サンモリッツで靜かに息子を待つ女流登山家なる母には何んと告げたであらうか。

一方タケットの方はタケットの方で、このフレッシフィールド一行との邂逅の模様を、彼が年來の山友達たるバックストン宛に旅先から次の如き書翰を送つてゐるのを見ると、興味は實に津々として盡きないのである。（續く）

註（一）
クギーはこの山旅でエドモンド・ド・アミチスという人から其の命息、ウゴ・ラングランを行つてくれと頼まれて一緒に登り着いた時、其の父親であるエドモンド・ド・グレイの出た所の描寫である。この親子とグレイの出た所の間は、又、淺からぬ關係があつて、グレイの著書には至る所に出て来る名前である。

小集會記事

松方三郎氏の講演

歐米登山界の近況

十一月十五日 於圖書室
司會——藤島 敏男氏

松方氏の昨秋インドへ赴いた時のことについては同氏の近著「遠き近き」によつていろいろ知つた。今度のヨーロッパ行きは去る七月にロイター通信百年記念祭への出席を目的としていたが、山岳會の人々は、同氏がいづれ何とか日をさいて訪ねることと思つていたスイスの話をきく機会を待つていたのであつた。

講演はローマを出た飛行機がアルプスに近づく所から始まつた。これらの山々との二十五年ぶりの再會を、距離と時間とを計つて待つてゐる。ところが、私などは、その當人でもないのに、今か今かという「ときめき」が、もう、うつつて來てゐた。會報一五七號の「スイスだより」にある、いろいろの話——僅か数日の滞在の中の出來ごとではあるが、エミール及びブラバンドとの再會、山、住民などについて——は同行の島田氏や伊藤氏の深く感動している様子を書いた島田氏の通信によつても知つたのであつたが、當夜、その時

の話をきいていて、多くの人々は現に行を共にしている心地さえたことと思う。松方氏はスイスからロンドンへ戻りアルバイン・クラブを訪ねたり Walton 氏に會つたりする。それからアメリカへ渡りアメリカン・アルバイン・クラブをたづねロスアンゼルスの方を廻つて歸つて來る。この講演の中には先輩や仲間の人々の名前が多く出た。グリーンデルワルドに眠る田口一郎氏の名前も——そして、そこへ訪ねて行くのだが。先輩のうち近藤さんや横さんが見えていたことは、私を含めて他の聴衆にとつて喜びを重ねるものであつた。横さんはしきりに笑つた。しかし、横さんの心中に未來するもう三十年も前になるかすかずの思出を我々はしのばずにはいられなかつた。多くの人は、正に、時のたつのを惜しんだのであつた。講演の後にカラ・フィルムのスライド約二十枚によつてアルプスの山々が美しく寫された。

このような講演には山へ登る人々だけが喝采するのであろうか。私は、全く山登りには關係のない一婦人を當夜この會に誘つた。スイスは松方氏と島田氏とが、熊の皮をかぶつて本物と見せかけている大きな男の兩わきに抱きかかえられて、マンマと寫眞をとられて

しまう。恐らく、山では危機に當つて精神と肉體の運動とが瞬間に鋭く一つに集中するような人々かと思うと餘計おかしい。私の誘つて行つた人は、もとより、この話に大いに笑つたのであつたが、又同時に、アメリカに於ける Louis Agassiz についての話、その小さい額を博物館に見出す講演者の「ひそかな」喜びを聞きもらしはしなかつた。そして、アマゾンの探險の時の「James, are you awake?」「I can not sleep; I am too happy; I keep thinking of these glorious plans……」(講演者はこゝは譯して言つた)という言葉にも心を打たれたといふことであつた。右の引用句は松方氏の示したアノルド・ランのジ・アルプス——一〇七頁——から書きとつた。更にその人の印象によれば講演者と共に、聴衆山岳會の人々のうちには他の所では見られないような或る「ナイヴ」な心持がうかがわれて、それがチャーミングであるといふ事であつた。いつもの事で、我々には餘り感じられないが、それはそうかも知れない。

私は當夜歸宅すると早速アガシイのことを更に知るうとして二、三の本を開いた。前年辻村氏の講演をきいた時にも、戻つてから、夜ふけに至るまで同氏の本を読みかえした事がある。山岳會に於ける之等の講演は、その度に私の心の窓のいくつかを開く。そして、廣い世界からの心地よい風が流れこむのを感じる。(田邊主計)

ボリヴィヤ山岳會より

拜復 當山岳會が高野岳雄氏を介して貴會へ宛てた書狀を受取られた旨御通知の八月三日附貴會正に拜受致しました。

最近、興味ある貴會誌「山岳」四四年一・二號正に入手致しました。右は當會員中で日本語を解する者に大變喜ばれております。私は、貴會の登山家達がアコンカグア登頂を企て、近い將來南米へ來られると云うニュースに喜んでおります。登攀に御成功の後には、是非當國を訪問なされる様切望する次第です。

この願に加え、私は貴會に對し尊敬の念の深まるのを覺えます。更に貴會との友好關係が開始されたことを喜ぶと共に、この關係が末永く続き、兩國のスポーツマンの間に深い理解が生れ出ることを確信致します。

一九五一年十一月二十日
ボリヴィヤ山岳會々々長
Dr. René Zalles G.
日本山岳會々々長殿

山上展望

戦争前だつたが或人、私をつかまえて、山登りの連中を汽車の中なんかで見かけるが、いでたちが威嚇的だつたり、中にはイヤに山ずれたようにゾンザイな格好のがいたりする。言うことも爲すことも、何となく「わざとらしい」お前も其うちの一人かと言わねばかりである。また此頃、山登りの映畫を見て「苦悶又苦悶とか、何かという直ぐ悲壯になつたり、しやちよこばるのが好きだね」とどうも評判がよろしくない。見る人の偏見か、或いは山登りの方が人前で意識的に振舞うのか。山登りに關係のない人々から見ても山登りの連中が目ざわりにならぬものであり、いや寧ろ好感をもつて眺められるものであればよいが。この間、朝日新聞の「エヴェレストへの道」の中で、ネパールのローカル線の終點ジョグパニに着くと、食事をする店も寝るところも見つかりそうもない。「折から降りしきる雨の中を、まつくらな眞夜中のブラットフォームにしょんぼり降り立つたのだつた」という所なんか、我々がその邊の山へ行つて、時に同じようにしょんぼりしているのと餘り違ひがないような書き方で好感をもつた(T)



(イタリー山岳會章)

會員通信

蓼科の友

渡邊公平

清らかな新雪をまとったその朝の蓼科山は、ほんとうに親しみ深い美しさをたえていた。

わびしいような樽ヶ澤の温泉宿で、初冬の一夜をすごした私たちの足は半ば、御泉水を経て山頂に通ずるあの美しい山道に向けられたのだつたが、會員交野君のいる蓼科山荘の門を叩かずにはこの高原を去るのも惜しまれ、結局、昨日の道を引返して湖畔に舊友を訪ねることにした。

十一月四日、すばらしく晴れあがつた日のことであつた。

豪茸の大きな農家風の山荘につらなる牧場事務所の簡素でまことに合理的な建物が、山荘とともに何とも云えぬ好もしさをもっている。山男としての交野君の洗練

された感覚と、牧場の管理者としての知性の高さとが、この牧歌的風景を支えているのだ。

かつてヒュッテ霧ヶ峰の主、長尾宏也仙人は、無人の牧場の番人たることを以て自ら任じたが、交野君の場合はそんな浪漫的な番人ではいけない。創業以来の苦心談はもし同君が將來それを發表されるならば、長尾仙人の「山の隣人」とはまた違った意味で蓼科と霧ヶ峰のユニークなそして貴重な風物誌となるだろう。

ストーブの燃えている彼の事務室の窓は、蓼科の全ぼうをすつぽりそのまゝはめ込める豪華な額縁であつた。この額縁の中で蓼科は冬の白衣を脱ぎ、早春の陽炎をもやし、青葉若葉に輝き、そしてまた錦繡の衣をまとうのである。

山のあけくれ、四季の移り変わり居ながらにしてそれらを眺められるこの山荘の主人の恵れた生活から恐らく幾つもの「たてしな」の歌が生れるであろう日を待つ。

「これからどうする？」

自分だけなら一日中でも山の話この山に住んでいる人間の話、動物の話など聞きたかつたのだが同行者もあつたので私は霧ヶ峰に登ることにした。

車山の肩から、もう山荘は眺められなかつたが、同君がこの冬は

是非やつて来いと云つた八ヶ峰の魅惑的な斜面が狐色に枯れて美しく展がつているのが望まれた。

この冬こそ、久し振りで車山から大門峠に滑り降り、雪に埋れた山荘の爐ばたに、久闊を叙そう……そんな夢を描きながら雪に耀く北アルプスの稜線に惹かれ、とうとう和田峠へ出てしまつた。

越後魚沼三山

十月十二日から三日間八海山中の岳駒ヶ岳と巡りました。ルース台風のおかげで雲が多く、中から駒を経て大湯に出た三日目は相當の風雨でした。岩峰や急崖や深谷は立派なもの、それに紅葉がまつさかりでとてもきれいでした。

八海、中、駒の小舎は何れもしつかりしており、炊事具や非常米の備えもあり、縦走路の藪は切り開きが出来、駒から枝折峠への路も開けました。私たちはその途中から小倉山の三角點を経て北方に派出する尾根をたどり、道行澤を佐梨川の合流點のすぐ上で渡渉する新道を下つて大湯に出ました。

大崎村の貝瀬武文(三十歳)はいい案内です。(野口末延・日高信六郎)

會報に原稿を御送り下さい
十五字詰用紙を使用のこと

大學山岳部の

冬山計畫

大 戦後OBの強力な指示と鞭撻で、何とか順調な歩みを續けて来た、早稲田式の登山法も大體身について来た。だから二十五年度の計畫には、若干の新しい要素を含め、瀧谷の登攀を行い、成功した。

私は正式に監督に就いてから、今度が二度目の計畫である。アンデスの計畫を進めて来て、學生もその主力を、これに抜擢する豫定でいたので、日本に於ける計畫は留守軍にまかせる筈であつた。それが延期になつたので、主力を以つて計畫に當ることになつた。

この春私は亦新しい二、三の要素を織り込んでみるつもりである。

第一はスピードである。スピードに事を運ぶことはスポーツに於ける根本要素の一つである。だから今度は、二月下旬から山に入るが、最初の一日間に、岳川から西穂に直登し、そこに前進第一キャンプを設け、奥穂を往復する計畫である。これを終えると岳川のベースキャンプを長七谷邊りへ移動し、明神岳東稜から、前穂

奥穂を往復する。これも一日と日数を限つてやる。登れなくても歸つて来る。これが終ると、全員で松本に下つて、安曇野を北上しようという腹である。春先の安曇野を馬車に乗つてなんかいと思ふ。そうして、西側に雪を覆つて聳える後立山を見物し乍ら、美しい山を物色しようというのである。自分の登りたい山を自分で探し、思い思いの登り方をさせたいと思つている。そうして三月の末か四月の始め頃、白馬の神田圃の我々の小舎に集つて、この計畫のしめくりをつける。學生は十六、七名位かと思ふ。それにOBも一人でも多く入つて貰うつもりだ。

厳格な規律が漸く、部員の間に込み込んで来たので、こういう計畫をつくらせるようになったのである。

(監督 關根吉郎)



佐藤久一創作

中央大學

昨年度、明神主稜より奥穂高への極地法で一應の成功を収めた我々は實力の確認と更に來年への飛躍の爲に資金面で悩み乍らも次のように冬山合宿を計畫した。

期間十二月十五—一月三日の豫定で隊員十八名（リーダー鈴木利一、齋藤武重、大野榮二）を六隊に編成し、B・Cを穂高岳岳澤一、八〇〇米附近に設置、ルートを天狗澤に採つて逐次C・I、C・IIを夫々天狗コル、奥穂高に建設し第一隊による北穂アタック、第二隊による前穂アタック、更に第三四隊のC・Iよりする西穂アタックを行う。C・IIを奥穂高に出ず爲、ロバの耳附近に約二百米のザイルを固定する、斯く第五・第六隊はC・Iまでのボツカが全任務であるがその他B・Cを基點として放射狀の登攀訓練も併行する豫定である。就中C・I、C・IIを使用する第一隊、第四隊の十名は何れも重荷でロバ耳附近の悪場を通過しなければならぬ上、夫々北穂・前穂・西穂の登頂を爲す點得難い訓練と経験を身に付ける事と思う。とにかく準極地法の形を執り乍らも、あくまで訓練としての極地法である點を強調しつつ、全體員の力量を多角的に伸ばしてみたいと思う。

又從來の冬山々行に於て新人のポストは一應限定されて來たが、今合宿では今迄の通念を破り各隊に新人を入れるという、我々としては相當大膽な新人起用を行つた。

これは新大學制（四年制度）の過渡期にあつて、これに對する我々の試みの一つである。慎重に實行して見たい。尙、今合宿の經費を概算すると

食糧費四萬圓（主食・副食・乾パン）

器具費三萬圓（光熱費・消耗器具・器具補修費）

宿泊その他三萬圓（計十萬圓）

此の内、部員が六萬圓を負擔する。併し天幕等の恒久器具に乏しい我部では、その製作購入も考慮しなければならず、今度の合宿も多分にもれず經濟的に苦しい合宿である。

同志社

豫定地域
後立山鹿島槍ヶ岳より白馬岳、途中豫定キャンプは二俣

冷池、八峰キレット、白岳、不歸の頭、このうち二俣は荷上げ後これを廢し冷池はアドヴァンスとベースの二様性を持たす

期間 二月下旬約二十日間
人員 十五名
經費 約四萬圓

リーダー 松月久左

過去數ヶ年その積雪期の全部をあけて研鑽して來た後立山をボーラシシステムによつて行い、その成果を問わんとするものである。尙出來うる限り多數の新人を用いて、氷雪技術の體得とその將來性の進展をはかる。

大

展開する。

德澤をBHとし奥又白谷松高ルンゼ合附近に中繼キャンプを設け、これより松高尾根に登路をと

り奥又白池畔にC・I、奥又尾根、A澤を経て前穂高岳にC・II、更に吊尾根を経て奥穂高岳にC・III、北穂高岳にC・IVを夫々設置し一月一日頃槍ヶ岳に登頂する。

此の間前穂高岳C・II設置直後に前穂高岳東面集中登攀（北壁、V字・Aフエース、三峰リッヅ、北尾根）を合せて行い。

行動上の作戦として計畫の前半前進根據地である前穂高岳のC・II迄は全員に依る漸進行動をとり、東壁の集中登攀が終り後半に入るや各隊行動によるスムーズな運行迅速なる登頂、合理的なる撤收を期す。

これに要する經費は約一六萬圓

位である。

教

一、南アルプス、表尾根を中心。
戸塚—北澤小舎をB・Cとする。

仙丈、駒ヶ岳アタック 新人の訓練及び技術、體力養成の爲。

廣河原小舎へ移動し、（現在野呂川下降の豫定）北岳一間の岳アタック（北岳小舎使用）天幕使用も途中に二つ位の豫定。

二、期間 十二月中旬—一月中旬
三、人員 十五名
四、經費 五萬圓位

五、リーダー 現在の所、四年桃井雅弘

六、登山目的の基本方針
新制大學四年制となるので個人のレベルを相當に上げなければならぬのでラッシュアタックを行い、又部としての團體行動の訓練のために北岳間ノ岳アタックにはサポート隊を用いる極地法を採用する。

又我が部の方針としては全員頂上をきわめる事を目的とするのでメンバーチェンジを行う（アタックメンバー）特に一年部員の冬山経験のため、廣範圍に渡つて歩いて見る事を（縦走形式）考えている

南アは戦後冬期に於て我が部としても入つていないので今回の計畫となつた次第である。

大

豫定地域
十勝岳オプタテシケ山トム

ラウシ山—黒岳—層雲峽
日迄
人員 十八名
經費 十六萬圓

チーフリーダー。木崎甲子郎
目的及び登山方法。

今迄部の先輩達によつて成さんとして成し得なかつた戦後冬期の十勝大雪縦走は、北海道に於て残された最も大きな山行の一つである。過去及び現在の経験により相當の悪天候が豫想されるが、天候に左右されないうて完遂する爲多くの日数を豫定した。各班三名、つ

六班に分け、縦走班は食料、天幕その他一切の裝備を持つて十勝岳白銀荘から出發し、五班のサポートのうち一班は十勝白銀荘から日歸りてサポート、他の四班は美瑛川をつめ一班はオプタテシケ山の北方に食料を中繼に上り、残りの三班はトムラウシ山の南から北方の化雲岩までサポートする。縦走班は化雲岩に於てサポート班と分

れた後獨力で層雲峽まで下りる。縦走班のキャンプ豫定地は、オプタテシケ山と美瑛富士の中間、オプタテシケ山の北方、トムラウシ山の南方、トムラウシ山の北方化雲岩、忠別岳と白雲岳の中間の五ヶ所である。



介紹書圖

アナブルナを望む

——フランスヒマラヤ

探險隊寫眞帖——

桑原 武夫

フランスは、世界人類が今までに登頂した最高の峯、アナブルナ（ニモルシアデイ、八〇七八米）を一九五〇年六月三日、征服することによって、世界を驚かせ、同時に、フランスも第二次大戦後おとろえたとする世界の認識に反省を強いた。一生に一度でもヒマラヤに夢をはせたことのある人間にとつて、この探險と登攀の記録ほど渴望されるものはないが、その完全な報告は『アナブルナ、最初の八千米級』と題して、隊長エル

ゾーグ氏によつて近刊の豫定だが、それに先立つて寫眞帖が出版され、松方三郎氏の許にとどいた。私はそれを拜借して目の正月をしたので、それをおすわけしたい。といつても寫眞を口で説明するのだから靴をへだててかゆいところをかくところではない。

Maurice Herzog, Marcel Ichac-Regards vers l'Annapurna B. Artaud, Paris Grenoble, 1951. Pp. XV, 96

本の型は四六倍版、フランス山岳會長とエルゾーグの序文があるが、それは一種の美文で夫として興味はない。假綴で表紙と裏表紙に原色で、それぞれキャンブ2からアナブルナを望むところと、負傷者が擔床にのせられて川を渡渉しているところとがあり、表紙の折返しのところ、二著者の小照とネパール美人の像とがある。寫眞は以上のほかに八十四頁（うち原色十頁）あつて、巻末に十二頁の寫眞説明がある。なおドーラギリとアナブルナ概念圖が附圖となつてゐる。

出来ばえは全くすばらしいという一言につきる。對象が全人類に未知のものだからというのではない。寫眞技術として一流であり、そこにいわばフランス文化がよく反映しているのだ。撮影は大部分

マルセル・イシャックだが、彼は一九三六年のヒドン・ピークを目ざした探險登山隊にも、とくに高山寫眞擔當者として参加した人物である。いま一九三六年隊の報告を出してみると、そこに最年少者として寫つてゐる美青年が、今はいかめしい山男になつており、その二枚の肖像が、會つたこともない人だが、その十四年間もちつづけた情熱と技術の進歩を物語るかのように、一種のなつかしさを感ぜさせるのである。（前の隊員で今回も参加したのは彼だけである。）寫眞材料と印刷術の進歩もあらうが、ヒドン・ピークのときと出来ばえは雲泥の差といつてよい。寫眞はフランス山岳會での計畫發表のところから、ネパールの首都カナムンズおよび登山の根據地となつたツクチャ村、さらに北進してチベット國境近くの寒村までその荒涼たる風景と珍奇な風俗を示すもの約二十數枚。そこに現れる人物はネパール國民の種々の複雑さを如實に示しているが、中に日本人かと思わせる顔が少くない。ネパール士官が一人、リエン・オフィサーとしてキャンブ1まで同行している。

山の寫眞は大たい行程どおりに配列されているが、説明文に照らし合せて、それを見てゆくと、エルゾーグらが最初からアナブルナを目ざして來たのではないことがわかる。世界の第六峯ドーラギリ（八一七二米）を彼らはまず目標としたのである。一九三六年の計畫の折も、フランスはまずドーラギリ、次にモルシアデイ、三十番峯（今のマナスル）マカルを考えたが、ネパール入國を拒否され、マカルについてはチベットからアタックせんとし、同國の入國許可は得たのだが技術上の理由で放棄して、カラコルムに向つた、という歴史をもつてゐるのだ。一行は四月下旬ツクチャ村につくと、すぐドーラギリの偵察に着手し、東面を五千米まで登つて退却、次に東北稜線および北面に廻つたがとうてい近づけぬことを覺つて、ここではじめてアナブルナに轉向したのである。ドーラギリがいかに雄大で、しかしいかに手ごわいかは、各方面からの美事な寫眞（十頁）によつてはつきり示されている。

アナブルナに接近しようとして、一行はかなり苦心し、かなりの日數を費したらしい。チリチオ峠をこして大氷湖を發見したりするが、ニルギリ連峯（最高七千米）にへだてられて近寄れない。そこで大迂回して再びツクチャに戻り四三〇〇米の峠をこして、ようやくアナブルナの北面に出て、ここに幸運の登路を發見する。その北面の二頁大の原色寫眞はすばらしい。そしてそこにはルートとキャンブ（B・C・四六〇〇米）からC5まで）の位置を示した概念圖がそえられてゐる。この山の北面は眞白でドーラギリに比べて一應の温容を示している。北面を直登したので、雪と氷の上のみで、岩場はほとんどない。しかし雪崩で危く生命を落しかけてゐる。勝利のあと、天候の激變に會い七千米の高さでビグアクをよぎなくされ、ようやくC2にたどりついたときの一行の疲勞し切つた苦しげな顔付き、雪盲にやられた「めしいたライオン」、しかし勝利のこる」等々、人物撮影にはいかにもフランス人らしい心理のこまやかさがあつて、これは他國人には及びがたいところであらう。登山家のみならず、一般の人にもすすめたい寫眞帖である。この寫眞帖を見て感じることは、今後の遠征の寫眞は色彩寫眞でなければならぬこと、日本の登山家中たとえヒマラヤに登りうるにしても、その苦しい登攀中にこれだけ優秀な撮影をなしうるものがあるかどうか、その方面の勉強もおろそかにしてはならぬということである。

ALPINE JOURNAL.

Vol. LIV No. 267

Nov. 1943

一九五一年中にわれわれの會として記憶しなければならぬことの一つは、ロイター通信百年祭を機に渡歐された松方氏が、ACCや紐育のAACを訪ね、戦争以來舶載されなかつたAJをはじめ、數々の山岳書を持ち歸られたことであらう。こゝでそれらのAJを一つ一つ紹介する餘裕もないが、戦中戦後の數年を通じてAJの内容に見られる共通な點は、アクティヴな登山の記事が影をひそめてACCの中老長老會員による憶い出が壓倒的なことである。往年のAJに收載された華々しい登山記が憶い出や隨想にとつかわられたことは、如實に戦争時代を反映しているのだが、一面から云えば、それらの幾篇かは、こうした時代がなかつたならば、恐らくは聴かれなかつたであらうような憶い出話なのである。しかもその語り手たるや殆ど凡てが登山史上の人々であるだけ、十分読みごたえのあるもの許りである。

第二六七號の巻頭を飾るG・W・ヤング(當時のACC會長)の『山の豫言者』の如き、まさにその一

つだが、ヤングはその中でアルプスの登山史上錚々たる人々の業績や著書について彼独自の見解を披歴しつつ、ACCを中心として興つた近代登山の系譜を美事な浮彫として示している。

『山登りは一つの発見だつた。

勿論歴史を省みれば過去に於て特殊の山に引き附けられた人や、山へ登りに行つたり、或は登ろうとした人が無かつた譯ではない。丁度それはニュートン以前の人々も林檎の落ちるのを見たと言ふことと少しも變りがない。併し、アルプスが人間の身心の悦樂と健康に資する何ものかを藏していることを、極めて特殊な一群の人々が発見したのは、ようやく前世紀の初頭のことだつた。』と云ふことから筆をおこし、彼が先づその父ジエームス・ヤングと同時代の登山者であつたJ・L・デヴィス、F・ハリスン、F・ボロツク、T・F・バクストン、G・プロテロ等を知り、次いで彼の世界が擴大するに従つて、ボニイ、ホーンビー、H・ジョーデ、F・モーズヘッド、H・ウォーカー、J・エックルズ、E・マッケンヂー、D・フレッシフィールド、A・J・バトラ、J・W・ハートレイ、C・E・マシウス、L・ステイヴン、E・ウィンバー等の人々を知るようになつ

た経緯を語っている。

ついでティンダル、A・ウィルス、ステイヴン、A・W・ムーア、ウィンバー、クローリッヂ、C・デント、コンウェイ、スリングスビー、コリイ、マンメリイ等ACCの會員中でも一流中の一流——即ち彼の云う豫言者達について語っているのだが、その一節を紹介すると、『ムーアも亦偉大な豫言者の一人だつた。彼の「一八六四年のアルプス」に見られる表現は、L・ステイヴンに次ぐ唯一のものである。彼と同時代の登山者中登攀技術と大膽さに於て、彼を凌駕するものはトチャールス・ハドスンあるのみ。またその著書から判断すれば、山登りの本質を把握していた點では、彼が最高だつたと思われる。』と云つた調子である。

またウィンバーには多くの語を費した後、より後の時代に降つては、『ノーマン・コリーは、多くの偉大な登山者が互に全く違つていた例にもれず、彼の仲間とは全く違つていた。彼の並はづれた稟質は際立つていた。彼は一流の科學者であつたと同時に一流の藝術家であり、それに附随する才能にも恵まれていた。彼は幸福にも、その探検的登山に於て、彼の才能のはけ口を見出すことが出来た。

彼はまた二つの豫言者的地盤のマスターでさえあつた。即ちロッキーや極地やヒマラヤの新しい山地では、剛毅果敢な先蹤者であり、他方人氣ないスコットランド、イングランド、アイルランドの絶壁や西部北部の海岸壁では最初のしかも屢々單獨の探検者でもあつた。これらの山々について、彼はケルト人特有の詩情を以て、書いた。或はまた着實な登山者、探検者としての全智を傾けて書いた。そしてその文章にはさながらケルトの吟遊詩人の筆に見られるような美が流れていた。』と近年物故したコリーのことを述べ、更に『マンメリーに到つてわれわれは再びアルプスに戻つたこと、そしてわれわれの山登りの發祥の地に二、三の並はづれた山案内と正統でない登山者の連續的な登攀によつて、新しい動きが同時に實行されていくのを知るのである。この理由から私は彼を後代の豫言者の最後に列せしめる。丁度私がウィンバーを彼と同時代の最後に置いたように。しかもマンメリーとウィンバーにはその他にも大いに似た點がある。二人共極めて有力な、また個性のはつきりしたクライマーであり、また革新派でもあつた。共にその登山について劃期的な書物をかきのこし、共に「神

話」の英雄に祭り上げられた。中略)クライマーとして彼と並び得る者は、その時代にはなかつた。氷雪技術も最高だつた——ノーマン・コリーが私に語つた言葉を用いれば彼は、少くも一流の山案内と同格であつた。』更にヤングは筆を進めて最後にJ・P・ファラーに及び、『パーシイ・ファラーは、恐らく近代の登山に唯一の最も大きな影響を與えた人である。彼は一冊に纏つた本こそ残さなかつたが、多年AJの編集者として、特に前大戦時代に山岳書としてのAJの高いレヴェルを維持し、他の著名な刊行物に比して全く遜色のない地位に高めた。彼がAJへ寄せた文章は個性が強く、雄渾で飾り氣なくその批判は手厳しかつたが、多くの人々の禮讃を博した。彼の長年の山案内ダニエル・マクニヤの告別の辭は從來の慣例を破つた素晴らしいものである。併し彼の影響はむしろ、彼が實際に行動した地域に於て、より強かつたに相違ない。(中略)われわれは、ファラーを以て後代の豫言者の改訂版が幕をおろしたと確言してもいいだらう。』と全體の結びをつけている。

以上はヤングのほんの一部の紹介に過ぎないが、まだ一面白い

箇所が少くない。

その他本號ではG・A・ヘスラ
1の『二人の有名なオーバーラン
ド人』と云う中に、フリッツ・ア
マッターのことが述べられ、當然
のこと乍ら秩父宮や横さんの名前
が出てきて、われわれには特に親
しみ深い。(TM)

會務報告

小集會記錄

第一三七回 十月十八日

講演 氷雪の富士

講師 會員 廣瀬潔氏

第一三八回 十一月十五日

講演 歐米登山界の近況

講師 會員 松方三郎氏

役員會

十月 常務理事會(十日、十七日)

役員總會(二十四日)

ヒマラヤ遠征問題檢討、第六回
及第七回國體打合、來年度會費の
件

第六回國體派遣者決定

十一月 常務理事會(七日、十四
日、廿一日)役員總會(廿八日)

第六回國體報告、第七回國體期
日繰上、第八回國體開催地検討、
來年度豫算、會費値上等。

關西支部横會長歡迎會

第六回國體に参加された横會長
の來阪の機會を迎えて、關西支部
では二年十一月一日夕に大阪驛
日本食堂で、在阪神會員有志に
參集していただき、歡迎會を催し
た。

夕方着阪と同時に疲れのほと
ろを、夕食と同時に始めていただ
いた。本部の各理事も加わつて參
集者も多く近來にない活氣のある
會合であつた。

會長からは國體登山部門が關係
各方面の絶大な協力によつて遂行
されたことを感謝せられ、この行
事はなにも日本山岳會のみのもの
ではなく、單にお世話の一端を受
持つてゐるのだという極めて謙虛
辛直な感想がのべられた。また日
本山岳會ほどこわゆるクラブらし

いクラブはないと、その傳統ある
クラブの本質をものべられた。續
いて望月理事から今回の國體の所
感が話された。

次に堀田理事から最近の福岡山
の會の外地遠征についての本部で
折衝した事項及び日本山岳會の立
場等について、色々と具體的な問
題について説明があり、横會長及
び望月理事より補足がなされたが
特に會長はJACとしては現在の
ところ遠征を應援する状況に至つ
ておらず、誠に残念であり、これ
はいやがらせやえこひいきをして
いるのではないから誤解のないよ
うにと注意があり、會員としては
出来るだけ應援をしたいと語られ
た。最後に林理事から本部の動向
特に支部問題、事務的なことなど
について説明があり、關西支部か
ら希望を申出た。

終始和氣アイアイのうちに關西
としては稀らしい一夕であつた。
最後に一席辯ぜぬ辯のために藤井
理事が起立しているところを記念
寫眞とした。

本部、横會長、理事四名。篠田
支部長ほか二七名。

關西支部有志懇談會

昭和二十六年十一月十八日、住友
電氣六甲山ノ家にて、敬老會とい

Château Brillant

山頂で 山小舎で
アルペンの氣分が満喫出来る
純フランス式高級ブドウ酒

サドヤ醸造場 甲府市御納戸町
(現品は山岳會ルームにあります)

傷害保險は是非!!

共栄火災海上



社長 宮城孝治

本社 東京都港区芝新橋5の1